団体名：苫小牧腎友会
回答日：令和元年 12 月 16 日

要望書（回答）

① 苫小牧市では、重度障害者タクシー料金助成制度、福祉ハイヤー助成制度、市内路線バス無料乗車証交付制度があります。これに加え、５年前から自家用車による通院補助として、年額 9,000 円の支給を受けられるという選択肢が増えました。透析患者の自家用車に対する通院補助は、通院の多様性に対応しているものであり、心より感謝申し上げます。一方で、通院補助が始まってから５年が経過しましたことから当時とは、消費税率や物価も変わっております。いま一度、自家用車の通院補助額の適正化について検討頂けますよう、お願い申し上げます。

【回答】（福祉部障がい福祉課　担当）
重度心身障害者通院交通費助成制度は、自家用車による通院をしている方を対象として、従来のバス、ハイヤー、タクシーといった公共交通に関する助成制度の利用が難しい場合や、実情に合わない場合にも御利用いただけるようにと、受給者の選択肢を増やす目的で平成 27 年度から開始した制度です。
補助額についてですが、現段階では適正な基準額と考えており、年々、着実に受給者数も伸長していることから、今しばらくは現行の内容のまま実施していきたいと考えております。

② 臓器移植は透析患者が透析を逃れる唯一の手段です。北海道では 548 人の腎臓の移植希望者がいながら、昨年度は移植の実施件数はゼロ件でした。今年に入ってからは、上期で５件が実施されました。北海道での長年の移植件数の推移をみると、移植医療は前進するどころか、むしろ、後退しているようにさえ思えます。この原因は、移植実施までの待機年数が平均 15 年から 20 年以上とたいへん長いことが挙げられます。臓器提供の意思を持つ方は多いものの、意思カードへの無記名や親族間での話し合いがなされておらず、移植に至らないケースもあるということでした。できるだけ多くの方に、臓器移植の現状を知って頂くには、たくさんの人が見る媒体で情報を提供することが重要です。そこで、市が出版する媒体において移植の現状について説明する内容の掲載を検討頂けますよう、お願いいたします。

【回答】（健康こども部健康支援課　担当）
臓器移植の普及啓発については、毎年 10 月の臓器移植普及月間に合わせて市役所の庁内放送で周知を図っているところですが、今後については、広報とまこまいや健康カレンダーを活用し、臓器移植の現状や重要性、臓器提供意思表示カード記入について、広く市民周知を図ってまいります。

③　災害時の要支援者の確認と名簿作成の活動をして頂いていることについて感謝申し上げます。要支援者を把握することは、災害対策の第一歩として、たいへん意義があることで、今後もこの活動を継続して頂けるよう、お願い申し上げます。

このことに関して、苫小牧腎友会がお役に立つことがあれば協力は惜しまないつもりですので、宜しくお願い致します。さらに、名簿等が整った次の段階として、実際に災害が起きた際の要支援者への駆けつけ行動は、町内会の単位で行うのが現実的と考えられますので、居住地区や集合住宅の部屋単位での要援護者支援、避難誘導の役割分担ついて、具体的な訓練を継続して頂けますようお願い申し上げます。

私達の透析には、透析設備とスタッフ、透析機械を動かす電力を得るための予備の発電機に加え、大量の水が必要です。透析を行うには、これらの確保が必須です。さらに、透析施設が使用不能の状態を想定した対策として、苫小牧市と北海道透析医会と市域内だけでなく、市域を超えて施設側との事前協議や患者の受け入れ医療機関との打ち合わせも必要と思われます。我々、透析患者は透析を継続できる環境を切に願っておりますので、このことについて検討頂けますようお願い致します。

【回答】（市民生活部危機管理室　担当）

要配慮者支援の訓練としましては、今年度複数の町内会で避難訓練にあわせて要支援者宅を訪問する内容の訓練が実施されております。今後も、こうした訓練事例を各町内会に御案内して、より多くの地域で要支援者に係る訓練が実施されるよう働き掛けてまいりたいと考えております。

また、災害発生時においても透析治療が継続的に受けられる環境整備につきましては、市としましても大変重要な課題であると認識しております。このことから、本市では避難者名簿を作成する際に、透析の必要性を把握するとともに、災害時応援協定などを活用して避難所から医療機関までの移送手段の確保に努めるほか、昨年発足しました市内の透析医療６施設の医師・看護師等及び市の健康支援課で構成されます「透析連携ミーティング」などの場を有効に活用し、医療機関との連携強化を図ってまいります。

④　現在まで治療法がなかった難病を自分の細胞を使って必要な臓器を再生する道を開いた iPS 細胞に代表される再生医療は、目の網膜、筋萎縮性側索硬化症（ALS）、パーキンソン、アルツハイマー、脳梗塞、脊髄損傷などの難病の治療への扉を開こうとしています。６年前から全腎協、道腎協、苫小牧腎友会において iPS 細胞による再生医療への協力と推進を活動計画に入れ、希望を持って活動しております。全国に先駆け、全道の患者、家族、施設、協力団体の皆さんで、iPS 細胞による再生医療への支援として、募金と研究者への励ましの手紙など患者それぞれの思いをお届けする活動を行っております。研究の進捗をただ傍観しているのではなく、少しでも研究の後押しをしたいとの思いからです。そして、これらの医療の進歩が私達患者に生きる勇気を与えてくれますし、また、市民の皆さまにも関心を持ってもらうことで、病気を抱える患者の理解にもつながればと願っております。また、苫小牧に住む患者、市民の皆さまがお互いを理解しあい、共生、共存の出来る街、福祉の街づくりに役立つこ

とを心から願っております。市民の皆さまが再生医療に関する情報に接する場を設けて頂けるような配慮をお願い致します。

【回答】（健康こども部健康支援課　担当）
再生医療については、専門医による市民向けの講演会等の開催が有効と考えますが、京都大学の山中伸弥教授のノーベル賞受賞以降、国内外からの注目が非常に高まっており、講演会の開催は順番待ちの状態となっています。
また、講演会開催の可否については、京都大学の講演等検討委員会で審議の上決定されるため、現在の申請状況や開催条件等について情報収集を行い、実現可能かどうか検討してまいります。

⑤　昨今、高齢化に伴う医療費の増加が問題となっております。日頃、人工透析医療で命を維持している我々として、この問題から目をそむけることはできないと感じております。今年の３月に、小ホールにて開催された慢性腎臓病の講演会（CKD 医療講演会）において、200 人を超えるたくさんの方々が参加しているのを拝見し、たいへん驚きました。我々、苫小牧腎友会は社会貢献の一環として、来年の秋頃に CKD 医療講演会の実施を計画しております。多くの腎臓病予備軍の方にお越し頂けるように、医師会や、はすかっぷプラザ（旧 保健センター）だけでなく、苫小牧市と積極的に連携して、CKD 講演会を進めていきたいと存じます。例えば、市の共催に加え、広報誌で周知して頂くことや、３月の時のように参加者へ”とまチョップポイント”を付与するなどの協力をお願いしたく存じます。
また、年に１度実施する健康診断は、個人の健康状態を判断する良い機会です。近年、塩分の過剰な摂取が、脳梗塞などの重篤な病気を引き起こすことが明らかになっており、減塩が健康を維持するキーワードであると考えられるようになりました。広島では、尿検査から推定接種塩分量を算出し、基準値に収まっているようであれば、医師から表彰される等の活動を行なっていると聞いております。苫小牧でも、このような減塩に関する取り組みの実施について検討して頂きたく存じます。

【回答】（健康こども部健康支援課　担当）
自覚症状に乏しい CKD を早期に発見し適切な治療につなげるためには、CKD の概要や予防方法について多くの市民に知っていただくことが大切であると考えております。
講演会の開催にあたりましては、広報とまこまいや市公式ホームページ、フェイスブックで周知を図るなど、多数の方に参加していただけるよう取り組んでまいります。
また、減塩に関する取組については、今年度展開している「みんなで健幸大作戦！」の取組テーマの１つとして「Smart Eat～適切な食生活～」を掲げており、自宅で手軽に作ることができるヘルシーレシピのコンテストを開催するなど、普段の生活の中で減塩や低カロリーを実践していただくよう普及啓発を行っているところです。
また、大作戦事業以外でも日頃の食育活動を通じ減塩の呼びかけを行っておりますが、今後は、今年度運用を開始した「食育人材バンク」の取組や出前講座などでも減塩について周知してまいります。